

「いつでも・どこでも・だれでもワークショップ」 幼児教育施設編

～保育者向け研修から園の実践へ

1. 保育者向け「ふるさとのおいろ」ワークショップ

日時：令和5年10月7日（土）13：00～14：00

場所：ふたばこども園

参加者：ふたばこども園職員6名（園長・主幹・職員4）

題材：5分でできる泥えのぐあそび

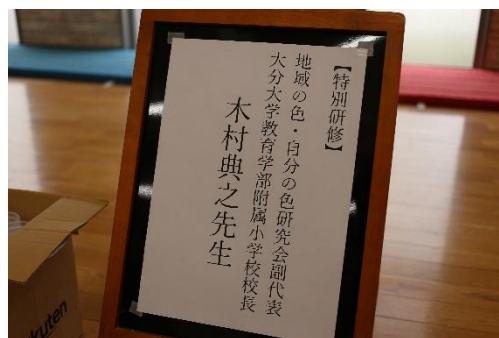
内容：身のまわりの植物や土が、お絵かきの材料になることを体験する。

この体験を通して、身近な色への気づきを促し、「地域の色’や’自分の色’の探究」のきっかけづくりとする。

講師：地域の色・自分の色研究会副代表木村典之

道具：プリンカップ、プラ容器（今回は、ペットボトルを1/2カットしたものを使用）、割りばし、筆、画用紙、水（ペットボトルに入れて準備）

材料：園庭の土（参加者が園庭を探索し採取）



使用した道具

（ワークショップの実際）

（1）「植物の色でお絵かき」の手順を知る

身近な植物をつぶすと色がでることをやってみせます。

保育で行う「植物を使った色水遊び」との関連から、同じ植物を使っても、「水を加えると色水遊び」（実践経験あり）、「水を加えないと絵の具遊びになる」（実践経験なし）ということの説明。

参考例として、保育者の目の前で「オシロイバナ」をプリンカップに入れ、1分間すりつぶして「だま」にして、そのだまできをかくて見せました。

ポイントは、水を入れないこと。（日頃おこなっている実践との違いです。）



手順の説明

（デモンストレーション）目の前で、実際やっているところを見て手順を知ります。



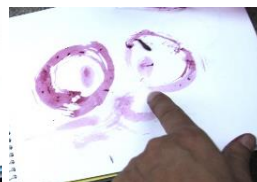
つぶす



「だま」



「だま」でえがく



指でえがく



手も染まりました

(2) 色の紹介と植物の命を大切に感じる感覚を知る

同じ手法で描いた「さるすべり」について「色の紹介」。その際、「花が地面に落ちたものを拾い集めて描く」という考え方を押さえました。散って落ちた花びらを使うことで、自然を大切に感じる感覚を養いたいからです。また、こどもの「拾い集めることを好む」行為とつなげることで、探究につながることを説明しました。さらに、「つゆくさ」の色の紹介を通して、咲いている花を摘むときは「花の命をいただく」という感覚ももたせたい、ということを説明しました。ただ、色を集めればよい、ということではなく、身近な自然を大切に感じる気持ちを育てることがねらいであることを強調しました。



地面に落ちた花でえがく（説明）



色の紹介「さるすべり（ピンク）」



色の紹介「つゆくさ」

(3) どこでも色は見つけれられることを知る

台所でも色を見つけることができることを、色紹介を通して説明。

例えば、ピーマンの「ヘタ」の部分は、お料理の時に捨てるけれど、それをつぶしたら黄緑色、赤いパプリカだと、オレンジ色になります。どれも子どもの力でできるものです。お料理をしているお家の人の協力が得られれば、親子で楽しむこともできます。また、コーヒーの出がらしを再利用することで、「捨てられるものの再利用」という視点を育てることも大事という話をしました。



色の紹介「赤ピーマン」



色の紹介「ピーマン緑」



色の紹介「パプリカ赤」



色の紹介「コーヒー」

(4) 泥絵の具の作り方を知る

泥えのぐの作り方(手順)を紹介しました。

- ① 採取してきた土に、水を加えて割りばしで10秒ほどかき混ぜます。
- ② かき混ぜるのをやめたら10秒待って、上澄みをプリンカップに移します。
- ③ プリンカップの様子をじっと見ていると、下に少しずつ泥がたまり始めます。30秒~1分
- ④ プリンカップの上澄みをもとのプラ容器にもどします。この時、下に沈んだ泥が泥えのぐです。



泥えのぐづくり手順の説明



① 土の採取



② 水を入れる



③ かき混ぜる



④ 上澄みを移す



⑤ 泥が沈むのを待つ



⑥ 上澄みをもどす



⑦ できあがり



⑧ 描いてみる

ここまでで5分です。原理は「重たいものは沈む」「粒の大きいものほど早く沈む」「水より軽いものは浮く」です。土の採取は、小石や草などのごみを取り除く必要はありません。水を入れてかき混ぜた段階で、重たい石や砂利は下に沈みます(写真③)。なので、この段階で分けることができます。

プリンカップに移した泥水を30秒~1分ほど放ってお

くと下に泥がたまり始めます。横から見たり、光を透かせたりして見ると、よくわかります(写真⑤)。

※ここが子どもと一緒に楽しむ場面です。

葉っぱなどの軽いゴミは水面に浮いています。必要なのは、プリンカップの下に沈殿した泥です。なので、写真⑥のように必要のない上澄みや浮いたゴミなどは、気にしなくても、最後に、元の容器にもどることになりますので、取り除かなくても大丈夫です。

え?こんなにかんたんなの?

似たことはやったことあったけど、今までは、なんだったの?って感じ...。(主幹)

これだったら、うちの5歳児は、はりきってやるね。3歳児もできるかも...。(園長)



(5) 体験「泥えのぐ」



泥水をプリンカップに移します



どれくらいまでばいいの？

講師の行った手順にそって、職員も同じように、園庭から採取した土で、泥えのぐをつくりました。

まずは、泥水づくり、そして、プリンカップに移して、しばらく待って、上澄みをもどす。「たったこれだけ？」「簡単！」「〇〇ちゃん、よろこびそう！」など、子どものことを思い浮かべながら、泥えのぐつくっていました。



横から見ると、上の方と下の方で色の違いが分かる…。

視線は、もっと下げたほうが
いいかも…。



色を並べてみよう！



畑の土

赤土

砂場

園庭ステージの上

築山のタイヤ階段の上

赤土

竹藪の中

赤土

砂場のサラサラ砂

園庭から見つけてきた土が、どんな色か、じっとみている保育者の姿を見ていた主幹が、「みんなの色をならべてみようか」と提案し、色比べがはじまりました。

並べてみると、隣同士の色の違いが際立ってきたり、似ているけれど微妙に違ったりなど、様々な気づきがありました。「園庭には、さがせば、いろいろな色がありそう」ということがわかってきました。



色と場所の関係を確認



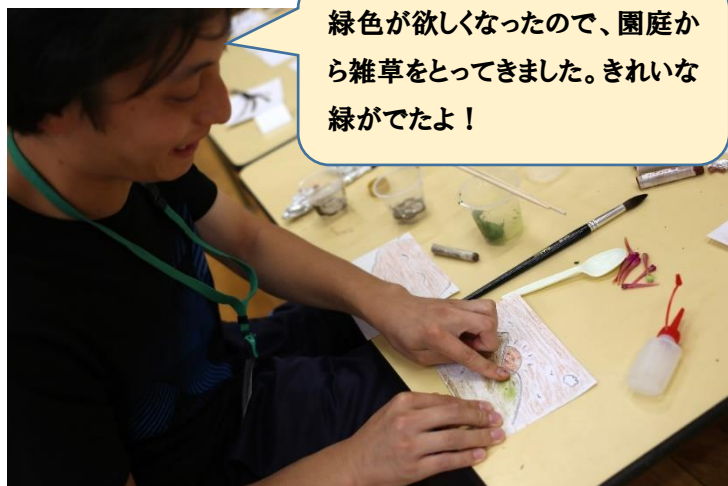
最後は、出来上がった泥絵の具のかき味を試しました。

図形や風景、人物など、思い思いに絵をかいてみました。園長先生も、洞窟壁画を描いて楽しんでいました。

保育者 A さんは、おもむろに園庭に出ていき、草をとってきて、すりつぶして、緑色を加えました。

子どもたちもきっと、ほかの色が欲しくなって探しに行くことでしょう。

それが探究の始まりです。



2. 研修を受けた保育者と園児による取組

令和5年10月中旬～

研修後、園では、保育者による環境構成がはじまります。

作業テーブルの上には、写真をはって、手順がわかるようにします。作業エリアもあります。

カップや容器など道具類をいつでも使えるように、園庭の一角に設置しました。



みんなの作業エリア

みんなの作業テーブル

**どろ えのぐを
つくってみよう！**

じゅんびするもの

つちをいれたようき・・・1つ
みずをいれたべっとぼとる・・・1ぼん
かっぱ・・・2こ
まぜるぼう・・・1ぼん

①つちをいれたようきにみずをいれます。

②みずをいれてかきまぜます。

③みずとつちがわかるまで待ちます。

④かっぱにみずだけいれる

⑤ふたたびまつ

⑥かっぱにみずをうつす

⑦のこったらえのぐのかんせい！

テーブルに貼られた手順書

そして、いよいよ、子どもたちが泥絵の具で遊び始めます。



1. 土に水を入れる



2. かきまぜる



3. 下に沈むのを待つ



4. 上澄みをカップに移す



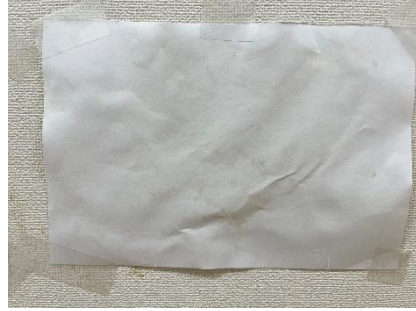
5. 再びまっ



6. 上澄みだけもどす



7. かいてみる



3歳児



3歳児



作品を飾る



5歳児



5歳児



2歳児：5歳児のしているところに寄っていき、触れてみる



5歳児



5歳児



5歳児

探究の姿



5歳児泥絵の具+草

土の色だけでは物足りなくなった子どもは、草の色をつけ足すことにしました。草の色が入ることで、たのしい感じになりました。

黄色や赤が欲しくなった子どもは、紅葉の葉を拾って、色を出そうとしますが、出ないことに気づきます。出る色と出ない色があるのは、なぜだろう？保育者と子どもと一緒に考える中、どうしても色を出したいという子どものたちの強い思いで、パステルの削ったものを加えることを思いつきました。



5歳児：クリスマスツリー：赤と黄色がほしくなったので、赤と黄色の落ち葉でつくろうとしたが、色がでなかった。



5歳児

共同制作：クリスマスツリー：赤と黄色が出なかったので、パステルを削ったものも使って、かいてみた。

活動が始まって以降、毎日のように、色作りに取組む子どももいます。そして、色作りがはじまると、お友だちと協力し合う姿があちらこちらで見られます。また、泥水が泥と水に分離するのを見る中で、色の違いを見分けようとする姿など、色への関心が深まっている様子がみられます。



協働のすがた



色を見分けようとする姿

さらなる探究へ

泥絵の具づくりが始まって、しばらくして、ある子ども（A児）が登園時、駐車場で黒い実（イヌホオズキ）を見つけたことから、さらなる探究が始まります。



登園後、A児が、取ってきた黒い実をすり鉢ですりつぶしてみると、きれいな紫色ができました。

A児は、すりつぶしながら「この紫の色クリスマスツリーにも使いたいんだよね」と呟いたので、保育者は、「作ってから描き加えに行こうか」と話をしました。

A児は、うれしそうに、掲示しているクリスマスツリーの絵に、自分が見つけた紫色を付け加えました。



紫色を付け加える姿



紫色が付け加えられたクリスマスツリー

A児が黒い実をすりつぶしたり、紫色をつくって塗ったりしている姿を見たB児が、「僕も実を使ってみたい」というので、もう一度、保育者も交えて一緒に駐車場まで行きました。

A児は、「ここにあるよ」といいB児に黒い実のある場所を教えます。そして、実を取って見せ、「これで足りるかなあ？」と話し合います。

A児とB児は、黒い実を園に持ち帰り、実と茎を分けたり、色分けしたりして、実をすりつぶし、紫色をつくりました。



友だちに採取した場所を教える



ここにあるよ



これで足りるかなあ・・・。



実と茎を分ける



緑の実と黒い実を分ける



すりつぶす



すりつぶす様子を見る



保育者にみてもらう



製作エリアにいきましょう

A児とB児が絵を描いていると、いろいろな子どもが集まってきました。

面白そうだとおもった園児達は、A児とB児が作った紫色をすこしずつ分けてもらい、絵を描き始めました。





子どもたちは、出来あがった紫色を、画用紙に全体に思いっきりぬって、紫色を感じていました。中には、おひさまや、築山などをかこうとしている様子が、絵からうかがえます。

紫色だけでは、物足りなくなったC児とD児が、園庭の土を集めて黄土色を作り始めました。

以前おこなった泥えのぐづくりを思い出したのだと思います。

保育者が、黄土色をどこに使うのかな、と観察していると、絵のまん中の山に塗り始めました。

築山を表現したい、という思いから黄土色をつくったことがわかりました。

最初は、色作りが楽しかったのですが、使いたい色のための色作りが始まりました。





うす紫と黄土色の組み合わせは子どもの発想です。

薄紫と黄土色を組み合わせた絵。これは園庭の築山を表しています。5歳児が薄紫色で絵を描いている（イヌホオズキは縁取りに使用）時に、「今の築山の色は土の色だから泥絵の具も作らなくちゃ」と呟いたのですが、イヌホオズキの絵の具を使っていたので、（手が塞がっていて）泥絵の具を作ることが難しいとも言っていました。すると、4歳児の女の子たちがそれを聞いて、「私泥絵の具作れるから作ってくる！」と言って泥絵の具を作り始めました。そのあと築山の後ろの木々もかきたいと、緑の草葉から絵の具を作り、描いたとのこと。また、イヌホオズキの紫色ですが、時間が経つにつれて、青紫色に変化していました。保育者が初めに気が付きましたが、子どもたちに「みんなが描いた絵は素敵だね」と、描いた絵を見つめるように声を掛けることで、色の変化に気がつく子が出てきたようです。（吉田園長コメントより）

